

かしはら



かしはら
第180号
令和四年
紀元2682年

- 御挨拶
 - 寛仁親王妃信子殿下御参拝
 - 主な祭典・行事の御報告
 - 橿原だより
 - 文華殿の由緒について
 - 工事中の貴重な様子を公開
 - 今後の主な祭典・行事の予定
- 社報『かしはら』バックナンバー公開の御案内



天香具山（天香久山）の土で作られた祭器で天神地祇を祀る神武天皇

御挨拶

暖かな日差しのお好季を迎え、境内の桜も咲いています。平素より橿原神宮を御崇敬頂いております皆様方には、愈々御健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。

さて、本年の紀元祭も昨年に引き続き全国の崇敬者皆様をお招きせずに齋行申し上げました。残念至極ではありましたが、オミクロン株による感染症拡大に伴い皆様の安全を考え、苦渋の決断に至りました。しかし例年通り御勅使の参向を仰ぎ、天皇陛下よりの御幣物を御神前に奉奠し、御勅使には御祭文を奏上あそばされました。皆様の御代表として責任役員・総代の方々に御参列頂き、御祭神 神武天皇の建国の御聖業を偲び、世界の平和・人類の幸せを祈念申し上げた次第であります。

令和二年の紀元祭より御祭神の故事に習い、天香具山（天香久山）で採取された土で造った祭器天平瓮を、天香山神社の造田宮司様より御奉納頂き、これも御奉納頂いた赤米・黒米をその平瓮に盛り、御神前にお供えております。令和の御代が始まったのを機に、地元有志の皆様が「天香山埴焼奉製会」を組織し、神武東征の場面を神事として復元されたのであります。

その場面とは次の通りです。大和に入られた神武天皇は、夢のお告げに従い部下に老父老婆の姿をさせて敵陣の先にある天香久山の土を取りに行かせます。そ

して部下が無事に土を取って戻ってきましたので、天皇は喜ばれてこの土で平瓮を始めとした祭器を作り、吉野の丹生川上にのぼり天神地祇を祀られた、この場面であります。

また、天香山神社の境内には「波波迦木」があります。御大典において大嘗祭の「齋田点定の儀」を行う際に亀の甲羅を焼いて齋田の場所を決める「亀卜」という古い儀式が行われますが、その甲羅を焼く際に使われるのが波波迦木であります。此の度も当神宮に御下命がありましたので、造田宮司様と往馬坐伊古麻都比古神社の谷野宮司様に両神社境内の波波迦木を採取して頂き、平成三十三年三月二十八日に小職と両宮司様共々宮中の祭祀を司る掌典職に参上し奉納して参りました。

この様に皇室の行事と関わりが深い神社の氏子の皆様は、自分達が日々朝な夕な親しんでいる天香具山の土を遙か昔、建国の祖である神武天皇が採取し、祭器を作り、神々を祀り国土平定されたことを誇りに思い、令和の時代に村おこしの一環に埴焼神事を始められたことは、橿原の地が今も神武天皇と共にあるということ象徴していることに他なりません。

コロナ禍の困難な社会ではありますが、皆様には御祭神の御加護を頂かれ日々安らかにお健やかにありますようお祈り申し上げます。

橿原神宮宮司 久保田昌孝



御参拝を終えられた寛仁親王妃信子殿下



寛仁親王妃信子殿下御参拝

去る令和三年十一月二十九日、寛仁親王妃信子殿下は奈良県での御公務に合わせて、当神宮に御参拝あそばされました。殿下におかれましては、令和二年四月二日の御鎮座百三十年記念大祭に御台臨の予定でしたが新型コロナウイルス感染症が世界中にまん延し始めた時期であったため、大祭への御台臨が叶いませんでした。このたびは、第五波が収まりつつある中で御参拝が叶った次第です。

晴天に恵まれた当日午後十二時十五分、殿下はお車にて養正殿に御到着になりました。養正殿では宮司の案内により、上皇上皇后両陛下が天皇御在位中の平成三十年に御下賜になられた御鏡「橿原の杜」及び付属品一式をはじめ、皇室縁の品々を興味深く御覧になりました。

昼食をおとりになられた後、御参拝のために白のロングドレスをお召しになり、お車で養正殿を出発。南神門でお車を降り、禰宜の先導により外拝殿を経て、外院斎庭石畳まで進まれました。ここで御手水と、修祓をお受けになられ、権宮司の先導で内拝殿に御到着。幣殿階下に立玉串を奉られ御拝礼されました。続いて宮司が御挨拶ならびに当神宮の御説明を申し上げ、時折うなずかれながらお聞きになっておられました。御参拝を終えられた殿下は外拝殿前で職員関係者による奉迎をお受けになり、また一般参拝者にも気軽にお声がけをしていらっしゃいました。養正殿にお戻りになり、午後四時十六分にお車にて当神宮を御出発されました。

このたびの御参拝は御公務ではなく殿下のお気持ちにより叶ったものと存じております。御参拝のためにお召し替えになったことから、御鎮座百三十年記念大祭への御台臨と変わらぬお気持ちで御参拝に臨まれたのではと拝察申し上げます。寛仁親王妃信子殿下におかれましては、外拝殿前の皇后陛下（現 上皇后陛下）の御歌碑にあるように『遠い歴史の彼方から吹いてくる、ひそやかな風の音』を感じて御参拝頂けましたのであれば幸甚に存じ上げます。

主な祭典・行事の御報告

七月

- ・一日 始之月次祭
- ・一日 夏越神楽祈禱
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・十日 第十三回全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会

- ・十一日 中之月次祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十一日 林間クイズラリー (詳細四頁)

八月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・十一日 中之月次祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・三十一日 林間クイズラリー

九月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・十一日 中之月次祭
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十三日 秋季皇霊祭遙拝
- ・二十一日 「重要文化財旧織田屋形 大書院及び玄関 建造物保存修理事業」工事安全祈願祭 (詳細四頁)

十月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・三日 秋季大祭 (詳細四頁)
- ・三日 秋季献華祭 (詳細四頁)



令和3年10月12日 拔穂祭



令和3年10月3日 秋季献華祭



令和3年7月10日 第十三回全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会

- ・十一日 中之月次祭
- ・十二日 拔穂祭
- ・十七日 神嘗奉祝祭並神嘗祭遙拝
- ・二十日 第三十七回 檀原菊花展
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十五日 軍艦瑞鶴慰霊祭 (詳細五頁)
- ・二十八日 献燈祭

十一月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・三日 明治祭【石州流献茶奉納】
- ・五日 写真展「檀原神宮 日々の風景」開催
- ・五、二十八日 中之月次祭
- ・十一日 後之月次祭
- ・二十一日 新嘗祭 (詳細五頁)
- ・二十三日 第三十七回 檀原菊花展
- ・二十八日 大絵馬掛け替え清祓
- ・二十九日 寛仁親王妃信子殿下御参拝 (詳細二頁)

十二月

- ・一日 始之月次祭
- ・二日 長山稻荷社月次祭
- ・十一日 中之月次祭
- ・十二日 「森への贈り物コンサート」祈り」開催 (詳細五頁)
- ・二十一日 後之月次祭
- ・二十三日 神御衣御料奉納奉告祭
- ・二十八日 煤払神事
- ・三十一日 除夜祭



令和3年12月28日 煤払神事



令和3年11月28日 大絵馬掛け替え清祓



令和3年10月28日 献燈祭

夏の教化活動

令和三年七月二十一日から八月三十一日の期間、境内にて小学生を対象としたクイズラリーを開催し、これに先行する七月十四日には林間学園に関する特設ウェブサイトを公開しました。これは、例年当神宮で小学校の夏休み期間に合わせて五日間開催している林間学園の開催見合わせにより、これに代わる教化活動として行ったものです。昭和二十四年から続く林間学園は境内の豊かな杜の中で授業を受け、たくさんの仲間と共に過ごすことで協調性や相手への思いやりを学んでいます。

特設ウェブサイトでは林間学園の歴史や授業の概要を紹介し、夏休みの自由研究に役立つように自宅でも学習できる内容にしました。また、奈良県神道青年会の協力のもと神武天皇を題材とした紙芝居を動画化し公開致しました。

クイズラリーは広大な境内を利用することで密を避け、檀原神宮にまつわるクイズを家族で楽しみながら解いていただけるように工夫しました。県内外より八十六名の児童に参加いただき、境内には楽しい声が響いています。



クイズラリーは午前中の涼しい時間のみに開催した

文華殿の修理に伴う工事安全祈願祭を斎行

令和三年九月二十一日に国の重要文化財 旧織田屋形大書院及び玄閣（文華殿）の本格的な保存修理工事開始にあたり工事安全祈願祭を斎行しました。

文華殿は、茶人としても名高く、また織田信長の弟である織田長益（有楽斎）の五男尚長を藩祖とする柳本藩（現天理市）の藩邸の一部になります。藩邸は天保十五年（一八四四）に竣工し、藩邸としての役割を終えた後、地元の小学校として利用されてきました。昭和四十年に建物の保存を目的として当神宮への移築工事が開始され、同四十二年に竣工。その年に重要文化財の指定を受けております。

近年、文華殿は礎石の不同沈下などにより保存に支障が出てきました。このため令和二年度から令和七年度に亘って、国や奈良県・檀原市の補助を受け、奈良県文化財保存事務所に修理を委託し実施することとなりました。

工事安全祈願祭は宮司をはじめ、奈良県文化財保存事務所所長など関係者十八名が参列し、午後二時から文華殿内で斎行しました。祭典では齋主の祝詞奏上に続き、大玄閣と工事用具が祓われ、その後、参列者が玉串を奉って拝礼しました。



大玄閣を祓う神職

「秋季大祭」並びに「秋季献華祭」を斎行

令和三年十月三日午前十時、「秋季大祭」を斎行しました。秋季大祭は国家の弥栄と国民の平安を祈念し、崇敬者皆様の家内安全・事業繁栄を祈念申し上げると共に、御祭神神武天皇が多く困難を乗り越えられて建国を成し遂げられたこと、大変長寿であったことに由来する開運と健康延寿の御神徳をお頒ちする祭典です。

この時期は新型コロナウイルス感染症、デルタ株の感染が広がっていたため、参列を御遠慮頂き、宮司以下祭員のみにて祭典奉仕を致しました。秋晴れのもと斎行された祭典では、祭員が御神前に神饌を供えたのち、宮司が祝詞を奏上。巫女による神楽「扇舞」を奉奏致しました。

また同日十三時より「秋季献華祭」を斎行致しました。祭典では華道嵯峨御流境將甫氏並びに社中の方々による「献華の儀」が執り行われ、御神前に神と松の生花が供えられました。

例年、当神宮の職員が修養に励む教室である「澄心会」も参加して開催されている献華展は中止となりましたが、御神前に供えられた献華は六日まで外拝殿北授与所にて展示し、参拝者の皆様にご覧頂きました。



厳肅に斎行された秋季大祭

④「軍艦瑞鶴戦没者並びに物故者慰霊祭」斎行

令和三年十月二十五日、若桜友苑において「軍艦瑞鶴戦没者並びに物故者慰霊祭」（以下「慰霊祭」）を斎行しました。

慰霊祭は大東亜戦争末期、昭和十九年十月二十五日に米軍との戦闘の末、太平洋フィリピン沖で殉職した瑞鶴の乗組員をはじめ、国の平和のために殉じられた英霊の御霊を慰める祭典です。

当日は小雨の降る中、瑞鶴の生存乗組員をはじめ、御遺族、関係者など約六十名の参列を頂きました。

慰霊祭では、斎主が祭詞を奏上し、巫女による神楽「浦安の舞」を奉奏致しました。続いて瑞鶴沈没の様子を回想した元乗組員の音声記録が流されました。

「（瑞鶴が沈没した）このとき永遠に、英霊として祀られる側と英霊を祀る側に別れたのであります」

音声記録には当時の様子だけで無く、慰霊に対する思いが語られています。

そして、瑞鶴が沈没した午後二時十四分にあわせ、参列者が黙祷を捧げ、平和を祈念致しました。

今後も慰霊祭を護持運営し、尊い生命をかけて祖国のために殉じられた英霊に、哀悼の誠を捧げて参ります。



英霊に拝礼する宮司

⑤参列を得て新嘗祭を斎行

令和三年十一月二十三日に崇敬者皆様の参列を得て「新嘗祭」を斎行しました。

この日は天皇陛下が宮中・神嘉殿において、御自らお育てになつた新穀を神々に奉られ、五穀豊穡を奉告された後、新穀をお召し上がりになります。これに倣つて全国の神社においても新嘗祭を執り行います。

当神宮では、境内の神饌田にて収穫された稲を懸税（初穂を青竹にかけたもの）として御神前にお供えし、実りへの感謝と国民の安寧を祈念致しました。

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大により、神武天皇ゆかりの舞である「久米舞」を奉奏出来ませんでした。今年は感染状況が小康状態であることを踏まえ、二年ぶりに奉奏することが出来ました。「久米舞」は神武天皇の軍勢が敵方との戦で勝利を収め、久米部の兵士がその勝利を祝う歌舞が起源となつた舞であり、現存する日本最古の歌舞とされています。

日頃より当神宮を御崇敬されている六百名以上の参列を得て執り行うことが出来ましたことに心より感謝申し上げます。



内拜殿にて久米舞を奉奏

⑥コンサートを通して 神武天皇の素晴らしさを伝える

令和三年十二月十二日、NPO法人音楽の森主催によるコンサートが境内の榎原神宮会館にて開催されました。同法人の理事長である荒井敦子氏は令和二年四月二日の御鎮座百三十年記念大祭において奉祝曲『時のほじまり』を作詞作曲し奉納されています。

コンサート開催が決まった後、荒井氏より神武天皇を題材とした楽曲を新たに作詞作曲したいという申し出がありました。これを受け、神職が荒井氏に神武東征について説明を行い、曲が作られました。「瑞穂の国 私たちの歴史」から始まる歌詞には、平和で豊かな国づくりを目指し稲作文化を広めながら大和国にて即位された神武天皇がおられたことで、今の日本があるという思いが込められています。曲名は宮司と荒井氏が案を出し合い、日本書紀の「夫の畝傍山の東南榎原の地を觀れば、蓋し國の境區か」をイメージして『美しところへ』と名付けられました。

コンサート当日、曲を披露し終えた荒井氏は観客席に向かい「少しでも神武天皇の素晴らしさは伝わりましたでしょうか」と問いかけ、訪れた人々は拍手をもって応えていました。



観客に披露された楽曲『美しところへ』

はじめに

橿原神宮文華殿は重要文化財であるが、正式には「旧織田屋形大書院」と「旧織田屋形玄関」の二棟で指定されている。「旧織田屋形」は奈良県天理市柳本町にかつて存在した柳本藩主の屋敷のことである。本稿では「旧織田屋形」が橿原神宮へ移築され「文華殿」となるまでの由緒について述べたい。

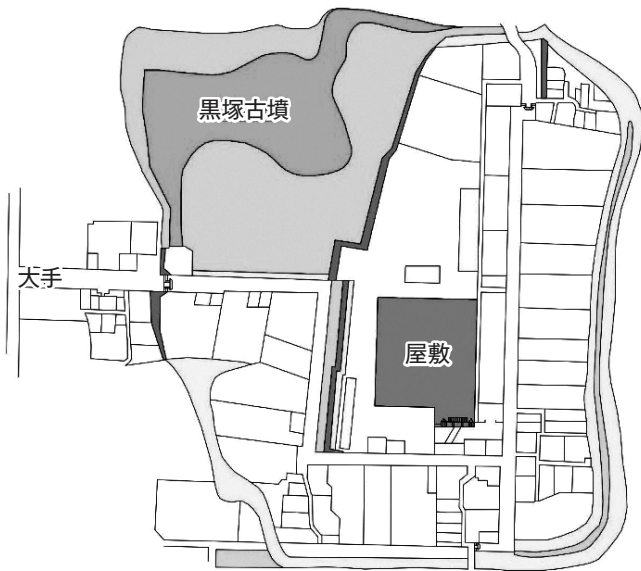
柳本藩の起り

柳本藩織田家の遠祖は織田長益（有楽斎）である。織田信長の弟で、兄の天下統一を支えていたが、道半ばで兄信長は本能寺の変で落命した。以後、甥の織田信雄の家臣となるが、小田原落城の後信雄が改易されると豊臣秀吉の御伽衆となり摂津味舌下村に二千石を拝領した。織田長益は茶人としてその名を高め、北野大茶湯に参加した。秀吉が亡くなると、徳川家康に従い、関ヶ原の戦いでは東軍として奮戦した。石田三成の家臣、蒲生頼郷を討ち取り、その働きが認められ大和に三万石が与えられた。しかし長益は大和へは入らず、大坂天満屋敷にとどまった。

元和元年（一六一五）、大坂の陣で豊臣家が滅亡すると長益は三万石のうち四男長政と五男尚長にそれぞれ一万石を分与し、残る一万石を自らの隠居料として残した。柳本藩は五男尚長を藩祖として明治維新まで続くことになる。

柳本陣屋と柳本屋敷について

大名の領国での住まいとして城が想起されるが、一万石の柳本藩は城を持つことが許されず、より簡単な陣屋を築いて屋敷を構えた。柳本陣屋は中世楊本城の跡地に藩邸を置き、黒塚古墳の周濠を内堀、外堀に利用して外郭を築き、その内側に家臣団の屋敷を置いた。天保再建時の建築計画図によると、藩邸のことを「柳本屋敷」、外郭を含めた範囲を「柳本陣屋」と呼んでいた。柳本屋敷は文政十三年（一八三〇）に火事で全焼し、天保十五年（一八四四）までに全て再建されたが、文華殿はその時の遺構である。



『柳本陣屋』(嘉永頃) 略図

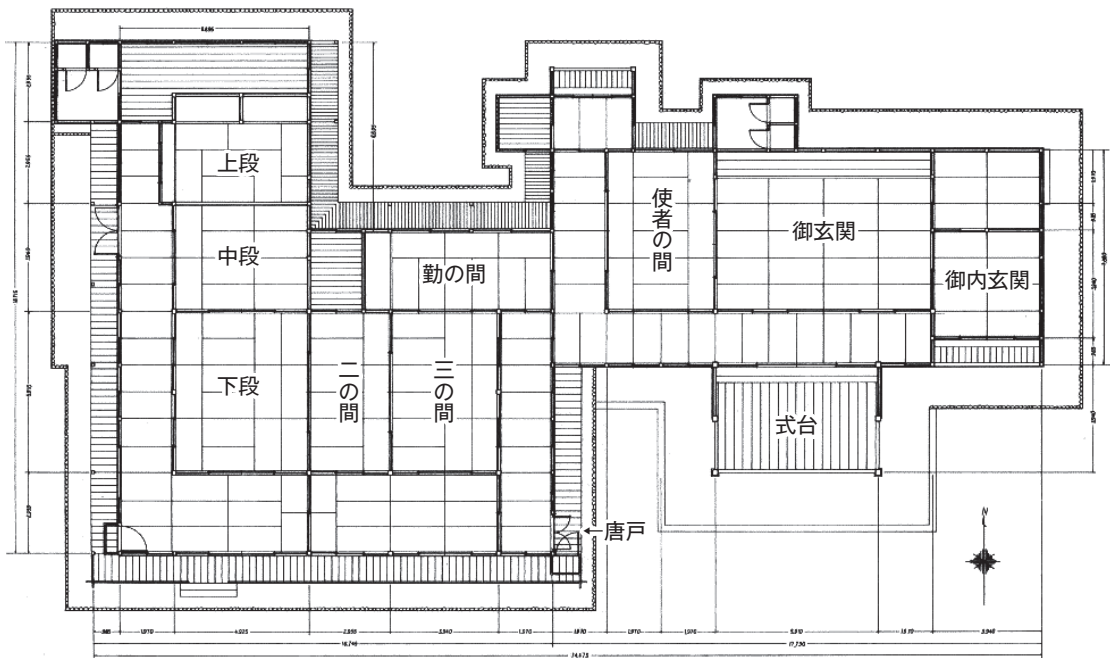
◎大書院と玄関について

文華殿は先述の通り「大書院」と「玄関」の二棟で構成されている。いずれも柳本屋敷の表向御殿を構成する最も重要で豪華な建物である。藩主が公式の対面をするにあたり、客人の出入口として玄関が使用され、大書院にて客人と対面した。

大書院には対面のための主要部分が上段・中段・下段の三室あり、下段から鍵の手に二室が続き、さらに来訪者の控室とみられる床を備えた一室が北に続く。これは二つの対面方法が複合した結果生まれた平面で、上段を主室として中段・下段に向かって対面する場合と、下段を主室として続く二室に向かって対面する場合がある。大書院の下段・二の間境の欄間は移築復原時に竹の節欄間に整備されたが、明治維新までは「百鳥の欄間」が嵌められ、下段も主室とするにふさわしい構えであったという。ちなみに上段・中段境は「桐に鳳凰」、中段・下段境の欄間は「雲に鳳凰」の丸彫りで、古図の上段には「桐之間」と記されている。

設えに目を移すと、上段に床、違棚、付書院、帳台構を備え、側廻りの建具に唐戸や蔀戸を用いるなど、主殿風の意匠が採られている。「主殿」とは本来寝殿造における寝殿をさすものであったが、寝殿造の簡略化が進むと複数の建物で分けられていた機能を一棟に統合する必要が生じた。大書院においては出入口（唐戸）と対面の場（上段・中段・下段）が複合した形式である。玄関があるにも関わらず唐戸を設け、主殿風の意匠を採用した理由については次の機会で述べたいと思う。

玄関は、式台の水引虹梁の木鼻や渦、若葉の意匠に江戸時代



文華殿 平面図

後期の特徴がみられる。式台の低い床は十七世紀末以降からあらわれる。式台を入った先にある玄関広間の床は、部屋の間柄方向全体に設えており、そうした見付幅の広い床は埼玉県の川越城本丸御殿玄関（嘉永元年＝一八四八）や三重県の旧龜山城新御殿玄関（文久四年＝一八六四）など江戸時代後期に類例がみられ、床框の位置が高い例は兵庫県の柏原陣屋表御殿玄関にみられる。織田家伝来の重器を客人の目線に近付けて陳列し、織田家の威信を示す狙いがあったのかもしれない。

◎明治維新後の柳本屋敷

天保十五年の再建から二十四年後に明治維新を迎える。明治四年（一八七二）に全国の城郭は全て兵部省の管轄となり、明治五年に兵部省が廃止されると陸軍省の管理下に置かれた。明治六年一月十四日に軍事拠点としての有用性から城郭の存廃が決定され、廃城の決定が下ったものは大蔵省の管理下となった。廃城の処分は同年十一月に新設された内務省に引き継がれた。柳本陣屋は廃城の決定が下り、屋敷の建物は民間に払い下げられ、大書院上段（桐の間）は八〇円、玄関は一二〇円の値段が付けられたが旧柳本藩士によって買い止められた。払い下げられた建物で現存するものは、天理市丹波市町の迎乗寺庫裏が知られ、中奥御殿の遺構と伝えられる。大書院の下段、二の間境にあったという「百鳥の欄間」は六〇円で売却され、アメリカに渡ったというが行方不明である。

明治七年に政府が推進する官立学校の設立にあたって官有地の無償付与が許可され、明治十年四月に柳本小学校が旧柳本屋

敷地内に移転した翌年に敷地五〇〇坪が無償で下賜された。

◎柳本小学校移転による改築

明治三十四年（一九〇一）の別棟校舎新築の際は、玄関は校長室と職員室に、大書院は下段の間及びその東南面の広縁を音楽室に、二の間、三の間及びその西南面の広縁が標本室に変更された。床は畳が撤去されたあと化粧板が張られて板の間になり、柱間装置も大きく変更された。

◎新校舎建設と旧校舎保存

昭和三十年代に校舎建替計画が進められ、大書院及び玄関は撤去されることになっていったが、地元有識者の間でその歴史的・文化的観点からこれを他へ移築して保存する策が講じられた。結果、昭和三十九年（一九六四）に大書院及び玄関は、これを所有する柳本区民より完全復原することを条件として檀原神宮へ無償譲渡された。

◎「文華殿」の誕生

檀原神宮は社務所東側の空地に大書院及び玄関を移築保存し、『文華殿』として文化的行事に供することとなった。移築工事の実施にあたっては「檀原神宮文華殿建設委員会」が設けられ、建設委員会は奈良県教育委員会に技術指導を依頼し、同教育委員会はこれに応じ、同事務局文化財保存課がその任にあたった。工事は請負工事とし、昭和四十年（一九六五）から解体工事に着手、同四十二年三月三十一日に一応の工事を完了し

た。その後多少の追加工事や森蘊氏の設計による神武東遷をイメージした庭園を整備し、同年十月十日竣工式が挙行された。工事中の昭和四十一年一月十三日付で奈良県指定文化財に指定され、工事竣工後の昭和四十二年六月十五日付で重要文化財に指定された。

◎やまいたに

文華殿の誕生から五十年余りが経過し、経年劣化による建物の歪み、屋根の傷みによる雨漏り等の問題が生じるようになった。このため令和二年十一月より保存修理工事に着手した。工事は奈良県文化財保存事務所の直営で実施するが、特殊な工事は請負工事で行う。屋根や基礎等の不具合を解消するだけでなく、耐震性能の確保や今後の文華殿の活用を見据えた設備工事も検討中である。竣工は令和八年二月を予定している。

プロフィール 山下秀樹（やました ひでき）

奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存事務所橿原神宮出張所、出張所主任。

平成八年奈良県庁入庁。平成十一年に文化財保存課・文化財保存事務所に異動し、以後文化財建造物の保存修理に携わる。唐招提寺金堂、宝山寺獅子閣、當麻奥院本堂・方丈・鐘楼門、長福寺本堂、当麻寺西塔を担当。令和二年十一月に橿原神宮出張所に着任。



文華殿外観 左が大書院、右が玄関

工事中の貴重な様子を公開

今春、本社報にも寄稿をいただいている国の重要文化財旧織田屋形大書院及び玄関（文華殿）の、保存修理の様子を特別公開致します。御紹介の通り、「文華殿」は織田信長の弟織田有楽斎の五男・尚長ひさながを藩祖とする柳本藩の屋敷が、天理市の柳本町から橿原神宮へ移築された建物です。現在、保存修理が奈良県に委託されます。特別公開では、貴重な江戸期武家屋敷建築の裏側を御覧頂けます。

期間

令和四年四月二十二日（金）～五月八日（日）

※詳細は決まり次第、公式ホームページにて御案内致します。



[上] 昨年12月に実施された記者説明会の様子。素屋根工事後、初めて報道陣に公開された
 [右] 素屋根で覆われた「文華殿」では、日々保存修理工事が行われている
 [左] 大書院の屋根部分。（特別公開時には、全ての瓦が下ろされた状態となる）

今後の主な祭典・行事の予定

四月	・ 二日 御鎮座記念祭 ・ 三日 神武天皇祭 ・ 三日 国栖奏奉納 ・ 二日～三日 春季大祭各種奉祝行事 ・ 第二日曜日 第十三期甲種飛行予科練習生戦没者慰霊祭 ・ 下旬 下種奉告祭 ・ 二十九日 昭和祭
五月	・ 二日 長山稻荷社例祭 ・ 三日 春季献華祭 ・ 五日 有楽流献茶祭 ・ 中旬 初鮎奉献祭
六月	・ 中旬 御田植祭 ・ 三十日 御本殿以下御社殿清掃 ・ 三十日 夏越大祓 ・ 一日 夏越神楽祈祷
七月	・ 初旬 林間学園 ・ 九日 献燈祭
八月	・ 初旬 秋季皇霊祭遙拝
九月	・ 九日 秋分の日 ・ 秋分の日 秋季皇霊祭齋行。

社報『かしはら』バックナンバー公開の御案内

公式ホームページにて、本紙のバックナンバーの公開を開始致しました。本紙は昭和二十一年に発行され、令和四年には創刊七十六年を迎えます。年二回の発行を通して祭典の御報告や、特別行事のお知らせ、各分野で御活躍の皆様による寄稿文などを御紹介しております。

※バックナンバー公開のページへはQRコードからもアクセスが出来ます。



春季献華祭 齋了後の外拝殿での挿花



国栖奏奉納

ようこそ、日本のはじまりへ。
橿原神宮

〒634-8550 奈良県橿原市久米町934
 TEL/0744-22-3271 FAX/0744-24-7720



橿原神宮



検索

発行日/令和4年2月
 編集・発行/橿原神宮庁
 印刷/岡村印刷工業株式会社